

【研究報告】

入院を繰り返す糖尿病患者にとっての入院の意味

中 信 利恵子*

【要 旨】

本研究は、入院を繰り返す糖尿病患者にとっての入院の意味を明らかにすることを目的に質的帰納的研究を行った。糖尿病コントロールが困難で再入院した患者2名を対象に、半構成的面接法を用いてデータ収集した。

分析の結果、『日常の気遣いからの解放』、『日々の葛藤からの解放』、『安心して医療者に身を委ねる』、『自己を変化させるきっかけ』の4つのカテゴリーと16のサブカテゴリーが見出された。

研究結果より、患者にとって入院は、日常の中で、糖尿病を自己の力でコントロールできなくなった時、医療者にすべてを任せて糖尿病をコントロールする手段であることが分かった。また、入院することが日常の雑事や周囲の人を気遣い、食事療法に取り組む中での葛藤から解放され、安心して糖尿病のコントロールを医療者に任せることができることを意味していた。さらに、入院は自己を変えるきっかけという、人生の転換点として意味づけられていた。

【キーワード】糖尿病患者、入院の意味、再入院

はじめに

糖尿病治療は、食事・運動療法に加え薬物療法がある。良好な血糖コントロール状態を維持し合併症を防ぎ、健康な人と変わらない日常生活の質を維持していくことに目標をおく。患者は一生に渡り治療を継続していくことを求められ、患者自身が病気や治療を理解し、自己のこととして引き受け、取り組んでいくことが必要になる。患者自ら生活行動を見直し、自己管理していくことで病気の悪化を防ぐことになる。そこで看護の役割は、糖尿病患者が自律して自己管理を継続していく力を持てるように看護援助していくことにある。

入院し患者教育を受けても、退院後糖尿病のコントロールが悪化し、入院を繰り返す患者がいる。先の研究(中信, 2001)において、再入院した糖尿病患者を対象に面接を行った。患者は食事療法や運動療法の必要性を自覚し、自己の生活行動が糖尿病のコントロールに影響することを体験していた。しかし、頭では分かっているのに実行できない思い、病院は自己管理を継続するための自己の居場所だと捉えている思いが見出された。また、入院することで医療者に治療を任せ、糖尿病のコントロールができるという思いを語った。この患者の思いは、入院によって、糖尿病がコントロールされ、患者教育によって、退院後に自己管理を継続してもらうという医

療者が目指している目的とは違う方向に向かっているように考えられた。入院を繰り返している糖尿病患者は、医療者が捉える“入院の意味”だけでは説明できない意味づけをしているのではないだろうか。そこで入院を繰り返す糖尿病患者が、人生途中で置かれた一つの局面である入院という状況を、どのように意味づけているのかを明らかにする必要があると考えた。

入院を繰り返す糖尿病患者にとっての入院の意味を明らかにした先行研究はほとんど見当たらない。土屋(1998)が、入退院を繰り返す糖尿病患者に面接調査し、患者が自己受容できていない傾向にあることを明らかにした。内藤(2001)は、再入院を経験した糖尿病患者に面接調査を行い、再入院することでこれまでの日常生活を振り返ることができ、自己管理に向け新たな改善策を見出そうとしていることを明らかにした。いずれも、患者が入院をどう意味づけているかについては明らかになっていない。

医療者側の視点ではなく、患者側の視点から入院することの意味を明らかにしていくことは、入院を繰り返す糖尿病患者の理解につながる。そして、患者が自律して自己管理を継続していける力を持てるための看護援助を考えるための手がかりとなる点において意義がある。以上のことから、本研究の目的

* 日本赤十字広島看護大学 nakanobu@jrhcnc.ac.jp

は、入院を繰り返す糖尿病患者にとって、入院することがどのような意味を持っているのかを明らかにすることである。

なお、本稿では、「入院の意味」というのは、その人が入院に対して持つ価値や重要さであり、その人が入院という体験を通して見出した意味と捉える。

方 法

1. 研究参加者

糖尿病のコントロールが困難で入院を繰り返している糖尿病患者2名とした。

2. データ収集期間

2001年11月～2002年7月の期間にデータ収集を行った。

3. 研究方法

研究参加者の語りを記述データとして、質的帰納的デザインを用いた。データ収集は、半構成的面接法によって行った。一人の研究参加者に対して1回1時間程度で、1～2ヶ月に1回の間隔で3～6回行った。面接場所は、病棟内のカンファレンス室、外来面接室、研究参加者の自宅を用いた。面接内容は、研究参加者の承諾を得て、テープレコーダーに録音し、逐語録とした。

入院の意味を明らかにするために、入院に対する思い、病気や治療、一生をかけて自己管理していくことに対する思い、今の生活に関して感じていること、そして、その時その場で研究参加者が一番関心を注いでいることについて問いかけ、面接を進めた。この間、研究参加者に起きている変化に注目して分析を行い、前回の語りで気になった部分やその思いをさらに深めたいと感じた部分に、次の面接で意図的に焦点を当てて問いかけた。

4. 研究参加者に対する倫理的配慮

研究参加者には、事前に面接内容について文書と口頭で説明し、同意を得た。研究への協力の強制はしないこと、面接開始後も質問に答えることの拒否・面接の中断・辞退も可能であること、今後の診療に不利を被ることはないこと、個人情報研究以外の目的で使用しないこと、データの管理は十分留意することを説明した。説明後参加の了解を得て、同意書に署名してもらった。毎回の面接の前に、研究参加への同意と研究参加者の健康状態を確認して面接を実施した。

5. 分析方法

本研究は患者側の視点から、研究参加者が入院に対してどういう意味づけをしているのかを明らかにすることを目的としており、先入観をもたずにその

意味を捉えるために現象学的アプローチを参考に分析した。

データを繰り返し読み、繰り返す入院の意味を表わす意味の単位を抽出した。そして、意味ごとに類似しているものを分類し名称をつけ、サブカテゴリーとした。サブカテゴリー相互の関連を比較・検討し、その意味を表わす名称をつけた。各研究参加者の意味を表わすカテゴリー相互の関係を検討し、研究参加者が語った内容を表わす、より中心となる意味を見出し、カテゴリーとした。分析過程で名称とデータが一致しているかを繰り返し吟味した。分析に際しては、質的研究方法の経験のある看護研究者にスーパーバイズを受けた。

結 果

1. 研究参加者の概要

研究参加者は、糖尿病コントロールが困難で再入院した女性2名であった。A氏は63歳、2型糖尿病、糖尿病歴は7年で、4回入院を繰り返していた。面接は6回行った。B氏は63歳、2型糖尿病、糖尿病歴が18年で26回入院を繰り返していた。面接は3回実施した。A氏もB氏も重篤な合併症はなかった。

2. 研究参加者が語った入院の意味

研究参加者が語った内容を分析した結果、入院を意味する16のサブカテゴリーが明らかになった。そして、16のサブカテゴリーから、中心となる入院の意味として、『日常の気遣いからの解放』、『日々の葛藤からの解放』、『安心して医療者に身を委ねる』、『自己を変化させるきっかけ』という4つ

表1 入院を繰り返す糖尿病患者にとっての入院の意味

1. 日常の気遣いからの解放
1) 家事に迫り立てられる日々の中断
2) 家事や家族への気遣いから解放される息抜き
3) 周囲への気遣いを優先し疲労した身体の休息
4) 身体を犠牲に家族の看病を優先した自己へのいたわり
2. 日々の葛藤からの解放
1) 血糖値に振り回される苛立ちからの解放
2) 強い食欲との闘いの辛さからの解放
3) 分かっているにもかかわらず実行が困難な食事療法からの解放
3. 安心して医療者に身を委ねる
1) 面倒な食事療法から解放される気楽さ
2) 医療者に糖尿病のコントロールを任せる
3) 医療者にすべて任せて自己管理に無関心でいられる
4. 自己を変化させるきっかけ
1) 糖尿病がコントロールされることへの期待
2) 病気を重大に受け止めていなかった自己を変えるきっかけ
3) 食欲に負けて自己管理できない自己の変化への期待
4) 後回しだった治療に取り組むきっかけ
5) 食欲をコントロールできる自己への変化のきっかけ
6) 自己の課題を見出すきっかけ

の 카테고리を見出すことができた(表1参照)。16のサブカテゴリーを4つのカテゴリーごとに事例を示しながら説明する。

結果に記述した研究参加者(以下患者という)の語りの分かりにくい部分は、意味が変わらない程度に修正した。

1) 日常の気遣いからの解放

『日常の気遣いからの解放』は、「家事に追い立てられる日々の中断」、「家事や家族への気遣いから解放される息抜き」、「周囲への気遣いを優先し疲労した身体の休息」、「身体を犠牲に家族の看病を優先した自己へのいたわり」の4つのサブカテゴリーから見出せた。

(1) 家事に追い立てられる日々の中断

患者は毎日行わなければならない多くの家事や、生活費のやりくりの心配、孫や夫の面倒や姑の看病、人とのつきあいに気を遣う様子など、日常のいちいちの出来事を語った。家を片づけたいのに片づかない状況に対するストレスがあることや、日常生活を過ごすことで精一杯の中で、自己の治療に専念することは難しいという状況を語った。そうした現実の生活と食事療法を行っていくこととの両立の難しさから、治療よりも現実の生活が優先してしまう状況であることが捉えられた。日々の生活を気遣うことを「面倒」と表現しながらも、こまごまと気にしている姿が語られた。患者にとって入院することは、忙しく立ち働く日常をいったん中断し、自己の周囲に向けた気遣いから解放されて、ほっとする場に置かれることを意味していた。

Data(患者A): 家に居たらストレスがたまる、朝お父さん早いから6時に起きてね、7時前にはご飯にしてあげないといけないでしょ。娘や孫を起こすでしょ。…私が孫のご飯のしたくとかするでしょ。…それをしながら洗濯でしょ。…これ以上何をどうしたらいいか分からないよ。心の安まる場所がない。(家の中に)物が一杯でストレス。掃除がしたくないし。

(2) 家事や家族への気遣いから解放される息抜き

患者は、家事や家族や周囲の人々に対して、こまごまと気遣う様子を語った。そして、日常生活で生活費に無頓着で次々と浪費する家族へのストレスを感じながらも、家族のことを気遣う様子を語った。しかし、家族は自分が気遣うほど何も考えないために、ストレスを感じ、そのことによって疲労する自己のことを語っていた。そうした日常の気遣いによるストレスから解放され、息が

ける場として入院を捉えていた。

Data(患者A): (家族の)協力って言っても「仕方ないわ」という感じよ。…家は、今は孫(娘の子ども)中心で回っている。嫁さんだったら「お母さんすみません。私変わらしましょう」ということがあるでしょ。

家があまりにも忙しいからね。(入院は)みんなから解放されるからね、ほっとする。だから、病院に入るのは嫌いじゃない。

Data(患者B): (退院して家に)帰ったらね、そういう用事がばーっと来るでしょ。植木の手入れをしようと思ってもできないからね。そんなことや何やかやあるからね。(家にいると)気になってね。…

(3) 周囲への気遣いを優先し疲労した身体の休息

患者は気遣うことで疲労する自己を自覚し、疲労した自己の身体を休息させる場として、入院を捉えていた。毎日周囲に気遣いすることで疲労する自己を自覚し、入院することが自己の休息の場になっていることを意味していた。

Data(患者B): 動くときは必死になって動く。友達が「あんたやり過ぎよ」というぐらいやりすぎてね。思いこんだらやってしまう。(カレンダーに)今日はここまで、明日はここまでと(予定が)書いてあってもね。ついやってしまう。

(4) 身体を犠牲に家族の看病を優先した自己へのいたわり

自己の身体を犠牲にして他者を優先して面倒を看てきたこと、今でも他者のことを自己が気遣っていることを語った。入院することが、家族を看病して悪化した身体をいたわることを意味していた。

Data(患者A): (姑さんの)妄想がひどいから、私の方がおかしくなる。それはひどかった。1週間に1回(姑が通っている)整形外科のT先生が「おばあちゃんよりね、お嫁さん(A氏)の方が弱ってる。おばあちゃんどうにかしてあげなさい」と言われた。…T先生に言われて(姑さんが)すぐに入院して、私はN病院にすぐに入った。

Data(患者B): 肝臓も胆嚢もこんなに悪いのに、「よくお母さんを看病していたな」とS先生がびっくりされました。私、気が張ってるでしょ。必死だったですよ。自分の身体のこととは、とんでもない身体になって…。

2) 日々の葛藤からの解放

『日々の葛藤からの解放』は、「血糖値に振り回される苛立ちからの解放」、「強い食欲との闘い

の辛さからの解放」,「分かっているけど実行が困難な食事療法からの解放」の3つのサブカテゴリーから見出せた。

(1) 血糖値に振り回される苛立ちからの解放

患者は毎日血糖値を気にしながら、食事を調整することに振り回され、努力しても血糖値が変わらないというストレスを語った。そして、血糖値が悪くなったために落ち込むと、その反動で強い食欲が出てしまうことを語った。患者は入院すれば、血糖値の変動に思い悩まなくてすむという意味づけをしていた。

Data (患者A) : 家で我慢して食べないようにしていても、ちょっとでも下げようと思って食べ物を減らすの。それでも下がらない時は、同じ数字になる。それがストレスになる。それが続くと不安になる。やっぱり病院で1ヵ月でも入院させてもらって、数値を下げてもらえばね。

(2) 強い食欲との闘いの辛さからの解放

日々何とかしないといけないと思いながらも、無意識に食物を口にしてしまう自己の強い食欲と葛藤する姿を語り、自己のできなさや食欲を抑える気持ちを投げ出したいと思うを語った。患者は入院を、目の前に食物がなく、医療者に管理された状況に置かれ、葛藤から解放されることだと意味づけていた。

Data (患者A) : いけないというのが分かっているけど食べる。頭がね、制御できない。我慢ができない。…これは食べてはいけないとは思っても、要求が強い。…気が狂ったようになることがある。…我慢できなくなる。…1ヵ月のうちに2, 3日ある。特に、もう1週間して病院に行かないといけないから、ちょっと減らさないといけないと思いたしたらだめ。“食べたらだめ”と思ったら欲しくなる。(気持ちと身体が) 一体にならない…一体にならないよ。

(3) 分かっているけど実行が困難な食事療法からの解放

患者は何度も食事療法についての患者教育を受けて、頭では分かっているけど、カロリー計算の煩わしさや病院の食事と同じようにはいかないという思いを語った。入院している間は、管理された食事が出され、難しい食事療法のことを考えなければならない状況から解放されるという意味づけをしていた。

Data (患者A) : 分かっているよ。分かっているけど、絶対難しいね。これ(血糖)が上がって、下がった時点で食べればいいんだけど、絶対私らは

下がりきらない途中で食べるんよ。絶対よくない。何回も聞いた。

3) 安心して医療者に身を委ねる

『安心して医療者に身を委ねる』は、「面倒な食事療法から解放される気楽さ」、「医療者に糖尿病のコントロールを任せる」、「医療者にすべてを任せて自己管理には無関心でいられる」の3つのサブカテゴリーから見出せた。

(1) 面倒な食事療法から解放される気楽さ

患者は、細かいカロリー計算など面倒な食事療法のことを、安心してすべて医療者に任せられると語った。入院は、患者にとって精神的に気楽になれる安らぎを意味していた。

Data (患者A) : (食べ終わった後は) 後悔というより、しまった、これでまた糖が上がるね。…1ヵ月のうちに1週間ほど糖尿病食の料理を食べさせてくれるようなところへ行きたい。ここ(病院)みたいに何もなくても、お散歩しただけで生活できるような温泉はないかね。それなら私行くよ。…5,000円出してもいいから、そこでやったら違うと思う。家で(料理)をしようと思ったら、何をしようかって考えるのが面倒。

(2) 医療者に糖尿病のコントロールを任せる

患者は糖尿病のコントロールのために、自己管理に取り組んでも、日常の中で実行することが困難で、うまくコントロールするためには、入院して医療者にすべて任せるしかないという意味づけをしていた。

Data (患者A) : うどんといったら、やっぱりみな1玉食べるじゃない。家ではうどん(1玉全部食べられないことが) 寂しいんよね。そうになったら、やっぱり病院しかない。教えてもらっているから頭にはあるけど。

Data (患者B) : 平成3年から、9年間、S先生に面倒見てもらってるんですよ。…(先生がいつも診てくれているから) 入院も早いですね。

(3) 医療者にすべてを任せて自己管理には無関心でいられる

患者は、自分のために管理してくれる医療者について語り、自己管理するという気持ちを語らず、食事の話をして話そらすという姿勢が見られた。医療者任せによる管理でコントロールしており、入院は、全てを医療者に身を委ね、自己管理することに無関心でいられることを意味していた。

Data (患者B) : 栄養士のH先生も必死よね。…夕食の箸を置いたと思ったら、すぐに来られた。必死になっと思ってだからね。…食事や栄養の話を

してね。「あなたは、腎臓もあるし肝臓もちょうとあれだし、心臓も悪いし」イカは糖尿病の人はこれぐらい食べられるわけよ。私は心臓が悪いから3分の1しか食べられないんよ。「ほうれん草よりもコマツ菜なんかを食べるようにしてちょうだいね」といろいろな話をね。

4) 自己を変化させるきっかけ

『自己を変化させるきっかけ』は、「糖尿病がコントロールされることへの期待」、「病気を重大に受け止めていなかった自己を変えるきっかけ」、「食欲に負けて自己管理できない自己の変化への期待」、「後回しだった治療に取り組むきっかけ」、「食欲をコントロールできる自己への変化のきっかけ」、「自己の課題を見出すきっかけ」の6つのサブカテゴリーから見出せた。

(1) 糖尿病がコントロールされることへの期待

患者は、退院して血糖が上昇し、糖尿病コントロールができていなくても、再入院することで医療者に糖尿病のコントロールを任せ、血糖値が是正されるという期待の気持ちを語った。また、患者は医師がいつも病気を管理しており、入院すれば必ずコントロールして貰えるという、医師への信頼と全て任せるという気持ちも語った。

Data (患者A) : 1週間、まともにカロリーがきちっとしたものを食べたら、ある程度、血液の中が変わってくるから。うちらでは、そういうカロリー計算なんかはできない。…1週間や10日(入院)したら、身体の体質は変わる…だから、私はそれがしたい。家のことをしていたら家では絶対できない。…(病院では)それだけ考えて、後は散歩しておけばいいでしょ。

Data (患者B) : 糖尿でね、S先生が入院するたびに診てくれるんです。…11年目ですからね。怒ってわざと「もう診てやらない」で言うんです。「知らんよ。先生に診て貰えなかったら、誰に診てもらうの」というてね。

(2) 病気を重大に受け止めていなかった自己を変えるきっかけ

患者は病気の恐さを実感できず、好きなだけ食べていた過去の自己について語り、それが原因で糖尿病になったという気持ちを語った。一方で、自己の病気よりも家族の面倒を見ることを優先したこと、発症時には糖尿病の恐さが社会的に広められず、医療者からも伝えられず、病気を重要視しなかったことを語った。入院を繰り返すことで糖尿病の恐さを実感したと語った。患者にとって、入院が病気の恐さを理解する一つのきっかけにな

っていたと捉えられた。

Data (患者A) : 病気に対して、重大な(病気だ)、どうしようかという気持ちがなかった、食事でも病院の糖尿病教室に何回も聞きに行ったけど、重要性を感じなかったのだと思う。だから作った物を皆と同じように食べ、お腹が空けばお腹いっぱい食べた。それがいけないのよ。…今みたいに入院してはじめて、一生懸命いろいろな勉強をした。まあいい、私達にはそんなもの(カロリー計算)はできないと思った。(入院が)1回が2回、2回が3回、歳も重ねて、今は糖尿病について、テレビや雑誌でもいかに重要で、悪い病気かというのを取り上げてるじゃない。…私の気持ちが徐々に変わってきた。初めはそんなことケセラセラで、言われてることもあまり自分には結びつかなかった。…(食事療法の必要性が)分かっているけど、食べる方が先だった。この2年は糖尿病について、こうなるから気をつけようというのはありました。…だから、少しは良いようにいくと思う。今度はやろうという意欲はある。まあ見て下さい。

(3) 食欲に負けて自己管理できない自己の変化への期待

患者は自己の食欲に負けてしまう気持ちを語りながらも、変わらなければと思う気持ちも語った。入院をきっかけに、自分が“変わらなければ”、“変わりたい”という期待が意味づけられていた。

Data (患者A) : やっぱりね、年じゃけえね。私もね、少しは努力してる。食べたい、食べたい言っていちゃあね…。

(4) 後回しだった治療に取り組むきっかけ

患者は家族を気遣う生活が中心で、いつも後回しであった自己の糖尿病の治療に取り組みたい思いを語った。入院をきっかけに、“今度こそは”治療に取り組んでいこうという意味づけをしていた。

Data (患者A) : できるだけ食べないようにして。今度はできるだけリュックを背負って歩こうと思う。今までは曖昧で家の用事の方を先にしてたけど、今度は先に散歩をしようと思ってる。…今一番決心しているのは散歩。

(5) 食欲をコントロールできる自己への変化のきっかけ

患者は自己の食欲を何とかコントロールしなければならぬ気持ちを語り、入院することが、自己を変える一つのきっかけになると意味づけていた。

Data (患者A) : 主人や皆と1週間に1回は必ず外食してた。1,000円のアイスでも2日ぐらいで食べてた。ああいうことは全然しないよ。…何回か入院を重ねるうちに、アイスとナタデココみたいなのがいけなと言われたから一切食べない。…変わっているよ、今ねすごく成長してる。

大分違う。食べる量が全然違ってきてる。…死ぬ時にはぱっと死にたいけど、長生きして行きたい、見たいところがある。…だからうんと違ってきたと思う。

(6) 自己の課題を見出すきっかけ

患者は日常の気遣いや食事療法が思うようにできない、食欲に負けてしまい葛藤する自己を語り、一方少しずつ変化している自己についても語った。患者は入院が自己の新たな転換点であり、自らの課題を見出し、再び自己管理に取り組むきっかけになるという意味づけをしていた。

Data (患者A) : 運動だね。…今度は何もかもやめて歩きましょう。今考えているのは、自動車に乗らないでリュックを背負って歩いて買い物に行くこと。

卓球も1週間に2日になったし。…身体がね、気分がねいいよ。だから楽しい。…気分爽快になるし。(何かしていたら食べ物のことを) 忘れるね。何が悪いんでしょうね…。食べる量だろうね、やっぱり。

考 察

入院を繰り返す糖尿病患者の語りから見出された入院の意味について、入院という状況の変化、役割の変化、糖尿病と共に生きるという観点から考察する。

1. 入院という状況の変化と入院の意味

入院を繰り返す糖尿病患者は、人生の一つの局面である入院という状況を次のように意味づけていた。『日常の気遣いからの解放』、『日々の葛藤からの解放』は、日常の雑事や周囲の人を気遣い、食事療法に取り組む中での葛藤から解放されることであった。そして、『安心して医療者に身を委ねる』は、治療のことを何も考えず、安心して医療者に任せることであった。また、『自己を変化させるきっかけ』は、入院によって糖尿病がコントロールされ、入院が新たな出発の転換点であり、自己を変化させるきっかけであった。

入院とは、Wu (1973/1975) によると、診断、ケア、そして(あるいは)治療の目的のために、ある長い期間身近な家族から離れて、人のある状況に

閉じ込めることである。家庭から病院に移ることによって、病気が新しい意味を持ち、家庭という安全な環境から、知らない人が自分の生活を支配し、親しみのない世界に押しこまれ、劇的に環境が変わると述べている。ところが、患者は入院を『日常の気遣いからの解放』と意味づけ、入院は“閉じ込められる”のではなく、「家事や家族への気遣いから解放される息抜き」という意味を持っていた。入院を繰り返すことで、病院という環境が、患者にとって未知の世界ではなく、休息できる環境へと変化したと捉えられる。

次に、入院の意味を、私達が生活している“場”という概念で考察する。Keen (1975/1989) が、日常生活は同時的に生じているいろいろな場の連続だと述べている。入院は、生活の場が、自宅という日常の場から病院という場へと空間的に変化することだけを意味するのではない。人が生きるということは、一日という時間を過ごし、人生という時間を生きることである。患者にとって、入院は時間的な場が変化することでもある。「家事に追い立てられる日々の中断」、「家事や家族への気遣いから解放される息抜き」と語ったように、日常の様々な出来事を気遣い、時間に追われて過ごす時間が、気遣いから解放される時間へと変化したと考えられる。また入院が「食欲に負けて自己管理できない自己の変化への期待」を意味し、患者の人生の過去から未来への転換点として意味づけられたといえる。さらに、入院という場の変化は、周囲の人との関係の変化を意味する。患者が「周囲への気遣いを優先し疲労した身体への休息」、「医療者に糖尿病のコントロールを任せる」と意味づけたことから、周囲の人に対して“気遣う”関係から、入院によって医療者に“気遣われ”、“身を委ねる”関係へと変化したと捉えられる。入院による周囲の人との関係の変化で、患者は心身共に安らぎを感じていたと考えられる。

2. 役割の変化と入院の意味

次に4つのカテゴリーについて、Parsons (1951/1974) の理論を用いて考察する。『日常の気遣いからの解放』には、日常を生きることが、掃除・洗濯・炊事などの家事や家族の面倒や、周囲の人との付き合いに追い立てられ、気を遣って生きることで、気遣いに疲労することだという意味があった。そして、様々なことを“しなければならない”という思いが、よけいに患者の気遣いへのストレスを高め、疲労につながり、入院が疲労した自己の休息を意味していた。『日常の気遣いからの解放』は、Parsons (1951/1974) による病者役割の第一の

期待である、正常な社会的役割の責務の免除につながると捉えられる。

『日々の葛藤からの解放』では、患者は「強い食欲との闘いの辛さからの解放」、「分かっていても実行が困難な食事療法からの解放」と意味づけ、日々葛藤する辛さに直面していた。“日常の気遣い”というストレスのある状況に、治療に向き合う“葛藤”が加わり、患者を追い込み、解放されたい思いにつながっていた。『日々の葛藤からの解放』は、Parsons (1951/1974) による第二の期待である、病気を自力では治せず義務を免除されること、すなわち日々治療に向き合う辛さから解放され、治療に取り組む義務の免除だと捉えられる。

『安心して医療者に身を委ねる』では、患者は入院によって“日常の気遣い”や“日々の葛藤”から解放され、医療者に身を委ね「面倒な食事療法から解放される気楽さ」、「医療者に糖尿病のコントロールを任せる」と意味づけていた。『安心して医療者に身を委ねる』は、Parsons (1951/1974) による病者役割の第四の期待である、医師の援助を求め協力するという義務の遂行につながり、患者は治療を医療者に“身を委ねる”形で協力していたと捉えられる。

『自己を変化させるきっかけ』では、患者は入院すれば糖尿病がコントロールされるという期待の気持ちを語る一方で、「食欲に負けて自己管理できない自己の変化への期待」、「食欲をコントロールできる自己への変化のきっかけ」という意味づけもした。『自己を変化させるきっかけ』は、Parsons (1951/1974) による病者役割の第三の期待である回復しようとする義務を、患者が入院をきっかけに果たそうとすることだと捉えられる。

3. 糖尿病と共に生きることと入院の意味

入院は日常の様々な出来事に向き合いつつ、糖尿病と共に生きる患者が、自分で病気をコントロールできなくなったときに、医療者にすべてを任せ、糖尿病をコントロールするという、生きるための手段でもあった。入院を繰り返す糖尿病患者に対して、看護者は“やる気がない”、“病気を軽視している”と捉えがちである(高村, 1999)。しかし、患者は日常の出来事や周囲の人を気遣いながら生きる中で、糖尿病を自己の力でうまくコントロールできない状況を語り、入院によって奔走して疲れた自己の身体を安心して医療者に委ね、日常から解放されて安らぎを感じ、再度日常に復帰するきっかけと意味づけていた。人間が生きるということは、日常の様々な出来事に向き合い、悩み、葛藤して生きるこ

とである。患者は糖尿病という一生に渡りつき合わなければならない病気になり、日常生活の中に治療という要素をうまく組み込むことを要求される。しかし、患者が『日常の気遣いからの解放』、『日々の葛藤からの解放』と意味づけたように、現実にはとても困難なことでもある。患者が語った入院の意味には、看護者は単に自己管理できない患者と捉えるのではなく、患者の状況に関心を向けて理解し、看護することの必要性が示唆されている。

『自己を変化させるきっかけ』から、患者は入院が自己を変えるきっかけになると考えていることが分かった。“入院を繰り返すうちに病気の恐さを理解した”と語ったように、入院が患者の変化につながっていたことは明らかである。しかし“言われたことが自分に結びつかなかった”と1回の入院では自己のこととして受け止められず、数回入院を繰り返して、はじめて実感したことを語った。Benner & Wrubel (1989 /1999) が、人間は意味を自ら作り出すとともに、状況とその持つ意味によって規定される存在であると捉え、現在の経験を通じて未来に新しい可能性が開けるとする主旨を述べている。患者が入院という状況の中で新たな体験をすることで、新たな意味を見出し、自己管理に向けての可能性が開けると考えられる。患者は入院を自己の人生の転換点として意味づけていた。患者が語った入院の意味には、入院を『自己を変化させるきっかけ』とする看護者の関わりの必要性が示唆されている。先行研究(中信, 2001)において、自己の感情や弱さ・できなさに向き合い、葛藤することで、自分自身が分かり自己の変化に気づくという結果は、本研究の結果に通じるものである。

本研究の意義と今後の課題

本研究で入院を繰り返す糖尿病患者が語った入院の意味は、糖尿病患者の体験や思いを理解するための助けになる。そして、糖尿病患者が自律して自己管理を継続していく力を得るための看護援助を考える上での示唆となり得る。

患者が“家族を気遣うことへの疲労”や“医療者に任せる安心感”を語ったように、入院の意味には他者との関係性が含まれ、入院によって他者との関係が変化していた。この関係の変化が患者自身の変化に関わる。入院を繰り返す糖尿病患者の看護援助を検討するために、患者が他者との関係をどう受け止め、どう関係を作っているのかを明らかにすることが今後の課題である。

結 語

入院を繰り返す糖尿病患者に面接を行った結果、次のことが明らかとなった。

1. 入院を繰り返す糖尿病患者の入院の意味は、『日常の気遣いからの解放』、『日々の葛藤からの解放』、『安心して医療者に身を委ねる』、『自己を変化させるきっかけ』の4つのカテゴリーと16のサブカテゴリーで構成されていた。
2. 入院は、日常の様々な出来事を気遣い、時間に追われて過ごしていた時間から、気遣いから解放される時間への変化であり、入院による人との関係の変化によって、心身共に安らげることを意味していた。
3. 患者が語った入院の意味を役割の観点からみると、日常の気遣いという社会的役割の免除、治療に取り組む義務の免除で、医療者に任せることで治療に協力し、入院をきっかけに回復しようとする義務を果たすことだと捉えられた。
4. 入院は、日常の様々な出来事に向き合いつつ、糖尿病と共に生きる患者が、自分で病気をコントロールできなくなったときに、医療者に任せて糖尿病をコントロールして生きていくための手段でもあった。
5. 患者は、入院することを、自己を変えるきっかけという人生の転換点として意味づけていた。

謝 辞

研究にご協力下さいました患者様に心よりお礼申し上げます。

本研究は、平成13年度日本赤十字広島看護大学の共同研究費（奨励研究）の助成を受けて実施しました。

文 献

- Benner, P., Wrubel, J. (1989) / 難波卓志 (1999). ベナー／ルーベル現象学的人間論と看護. 東京, 医学書院.
- Keen, E (1975) / 吉田章宏, 宮崎清孝 (1989). 現象学的心理学. 東京, 東京大学出版会.
- 内藤祥子 (2001). 糖尿病患者の再入院にいたる過程. 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, 26号, 303-309.
- 中信利恵子, 鈴木正子 (2001). 入院を繰り返す糖尿病患者のエンパワーメント—継続した面接で患者-看護者間の対人関係を開く事を通して—. 第21回日本看護科学学会学術集会講演集, 141
- Parsons, T. (1951) / 佐藤勉 (1974). 社会体系論.

東京, 青木書店.

高村英子, 山田美佳, 藤本恵子, 三田時子, 酒見泰子, 猪飼ますみ, 市山かずみ, 山口千佳子 (1999). 再入院を繰り返す糖尿病患者に対する看護婦の意識—心理的アプローチを通して—. 奈良県立三室病院看護学雑誌, 15, 44-47.

土屋武美 (1998). 入退院を繰り返す糖尿病患者の心理. 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, 23号, 325-332.

Wu, R. (1973) / 岡堂哲雄 (1975). 病氣と患者の行動. 東京, 医歯薬出版株式会社.

The Meaning of Hospitalization for the Diabetic Who Repeats Hospitalization

Rieko NAKANOBU*

Abstract:

The purpose of this study was to clarify the meaning of hospitalization for the diabetic who repeats hospitalization. This study was of a qualitative inductive design. Using a semi-structured interview, I interviewed two patients who were re-sent to the hospital with poor self-control.

The finding of this study was that hospitalization fulfilled four purposes: 1) release from everyday concern; 2) release from daily conflict; 3) release from concern about self medical care; 4) the chance to change the self. In addition, analysis showed 16 sub-categories of purposes.

The findings indicated that the diabetic who cannot control her diabetes sees re-entering the hospital as a means of leaving everything to the medical staff for controlling her disease. Hospitalization also provided release from concern about everyday affairs and those around her, and release from the need to face dietary therapy. One patient attributed significance to hospitalization as a turning point in her life, a chance to change her self.

Key words :

diabetic, meaning of hospitalization, re- hospitalization

* The Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing